

新聞新明公

2013年(平成25年)1月27日 第16279号

昨年12月25日から29日、福岡市を拠点に活動するカンボジア地雷撤去キャンペーン(CMC)大谷賢二理事長(ツアー)に同行し、カンボジアの地雷原を歩いた。

(九州支局・篠倉 淳徳)

カンボジア 地雷原 歩いて

1970年代、ベトナム戦争後のカンボジアでは、内戦が勃発。この時期に、国内各地に大量の地雷が埋められた。現在も、400〜600万個の地雷が残っており、死者を出す悲惨な事故が、相次ぎ起きている。

ツアー2日目、地雷原へ向かった。アンコール遺跡群があるシムリアップ市内から北部へ、バスで約3時間。タイ国境に位置するオターミエンチャイ州のコンクリエール村に着いた。数軒の民家が並ぶ集落の裏に、うっそうとした樹木が生い茂る。地雷原だ。

暗い歴史を乗り越え、前へ

そこで、現地の地雷撤去チームに所属する男女約30人が黙々と作業を続けていた。

気温30度を超える酷暑の中、重い防護服やヘルメットを身に着け、早朝から8時間以上、地道な作業を行う。現地に入って2時間後、作業中の隊員が地雷を発見。特別に、爆破処理を実施してもらうことになった。

緊張した面持ちの隊員たちに促され、100mほど離れた場所へ移る。遠隔操作による爆破の瞬間、「ドーン！」という爆発音とともに強烈な地響きが起きた。全身に伝わるその迫力に、思わず息をのんだ。もし、人間が踏んだなら……。一瞬、恐怖が脳裡をよぎった。

隊員のポト・リスさん(27)は「危険な仕事だが、自分が勇気を出すことで、みんなの役に立てる」と瞳を輝かせる。過去の暗い歴史を抱えながらも奮闘するポトさんら。その姿から、自分の命を懸けてでも、平和な国を築き上げるといふ、強い意志を垣間見た。

垣間見た平和構築への強い意志



金属探知機を抱え、撤去作業をする隊員。一つ一つ丁寧に作業を進める